

1 trenban.sty とは何か？

縦書きの試験問題で傍線問題や空欄補充問題 (穴埋め問題) を作成する際に、傍線の冒頭部分や空欄の中にアイウエオ順や abc 順に記号を付けることがよくあります。こうした記号を自動的につけるマクロが trenban.sty です。

このマクロは、国語のように縦書きで試験問題を作成することを想定しています。

このマクロは藤田眞作氏の作成された縦書き用の tkokugo.sty と anaume.sty を一つにまとめ、改編したものです。このマクロには傍線を引くマクロは含まれていませんので、別に下記のサイトなどからダウンロードする必要があります。

2 準備

trenban.sty を使って、傍線問題や空欄補充問題 (穴埋め問題) を作成するには、下記の手順で行います。なお、下記の説明は「LaTeX2ε 美文書作成入門」(奥村晴彦著) に添付された DVD-ROM から Windows 7 にインストールした場合を想定しています。これ以外の OS や異なる方法でインストールした LaTeX についてはそれぞれ読み替えてください。

1. trenban.zip をダウンロードし、解凍します。
2. 解凍したファイルの中にある trenban.sty を c:\w32tex\share\texmf\tex\latex の配下にコピーします。
3. 傍線を引くマクロをダウンロードして、適切な場所にコピーします。傍線を引くマクロには以下のようなものがあるので、このうちのどれかをダウンロードするとよいでしょう。下線を引くマクロも c:\w32tex\share\texmf\tex\latex の配下などにコピーします。うまく動作しないようでしたら、コマンドプロンプトなどで mktexlsr を実行すると、動作すると思います。
 - (1) 藤田眞作氏のサイト (<http://homepage3.nifty.com/xymtex/fujitas2/texlatex/index.html>) にある "tsayusen.sty" と "tnamisen.sty"
 - (2) T Domae 氏のサイト (<http://homepage2.nifty.com/domae/tex.html>) にある "udline.sty" (アンダーラインマクロ)
 - (3) しっぱ愛好家氏のサイト (<http://www.h4.dion.ne.jp/latexcat/macros/macro-index.html>) にある "uline--.sty"

3 概要

trenban.sty は以下のような記号を使うことができます。

1. カタカナのイロハ順 (最大 48 文字)
2. ひらがなのいろは順 (最大 48 文字)
3. カタカナのアイウエオ順 (最大 48 文字)
4. ひらがなのあいうえお順 (最大 48 文字)
5. 漢数字順 (12 を十二と表記する方法で最大 120 まで)
6. 漢数字順 (12 を一二と表記する方法で最大 120 まで)
7. 半角の英小文字 (abc) 順 (最大 26 文字)

8. 半角の英大文字 (A B C) 順 (最大 26 文字)
9. 全角の英小文字 (a b c) 順 (最大 26 文字)
10. 全角の英大文字 (A B C) 順 (最大 26 文字)
11. アラビア数字順 (最大 99 まで)
12. 丸数字順 (最大 20 まで)
13. 全角数字順 (最大 9 まで)

それぞれの記号ごとの使用方法は以下の通りです。

(1) カタカナのイロハ順

傍線付きの問題でカタカナのイロハ順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線イロハ#1#2{\raisebox{1pt}{%
\イロハ設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}
\def\二重線イロハ#1#2{\raisebox{1pt}{%
\イロハ設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}
\def\波線イロハ#1#2{\raisebox{1pt}{%
\イロハ設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「イロハ設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は ○ で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等に行っていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線イロハ{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線イロハ{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線イロハ{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄イロハ{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\イロハ ref {変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は ○ で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\イロハ ref {変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{イロハ設問}{0}`

とします。また、連続しない番号を付番する場合も`\setcounter{イロハ設問}{11}`などとした後に、「`\下線イロハ{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄イロハ{変数}`」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「ヲ」を表示します。

なお、カタカナのイロハ順は最大 48 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(2) ひらがなのいろは順

傍線付きの問題でひらがなのいろは順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線いろは#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\いろは設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
  
\def\二重線いろは#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\いろは設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
  
\def\波線いろは#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\いろは設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「いろは設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線いろは{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線いろは{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線いろは{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄いろは{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\いろは ref{変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\いろは ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{いろは設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{いろは設問}{11}` などとした後に、「`\下線いろは{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄いろは{変数}`」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「を」を表示します。

なお、ひらがなのいろは順は最大 48 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(3) カタカナのアイウエオ順

傍線付きの問題でカタカナのアイウエオ順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線アイウ#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\アイウ設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線アイウ#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\アイウ設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線アイウ#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\アイウ設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「アイウ設問」のオプションは [0],[1],[2],[3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等に行っていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線アイウ{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線アイウ{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線アイウ{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄アイウ{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\アイウ ref {変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0],[1],[2],[3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\アイウ ref {変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{アイウ設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{アイウ設問}{11}` などとした後に、「`\下線アイウ{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄アイウ{変数}`」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「シ」を表示します。

なお、カタカナのアイウエオ順は最大 48 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(4) ひらがなのあいうえお順

傍線付きの問題でひらがなのあいうえお順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線あいう#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\あいう設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線あいう#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\あいう設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線あいう#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\あいう設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「あいう設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「**\傍線あいう{変数}{傍線を引く箇所}**」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「**\二重線あいう{変数}{傍線を引く箇所}**」や「**\波線あいう{変数}{傍線を引く箇所}**」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「**\空欄あいう{変数}**」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「**\設問 ref [0]{変数}**」とするか、「**\あいう ref {変数}**」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「**\あいう ref {変数}**」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{あいう設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{あいう設問}{11}` などとした後に、「**\下線あいう{変数}{下線を引く箇所}**」や「**\空欄あいう{変数}**」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「し」を表示します。

なお、ひらがなのあいうえお順は最大 48 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(5) 漢数字順 (12 を十二と表記する方法)

傍線付きの問題で漢数字順 (12 を十二と表記する方法) の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線漢数字乙#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字乙設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線漢数字乙#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字乙設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線漢数字乙#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字乙設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「漢数字乙設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は長円形 (カプセル型) で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線漢数字乙{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線漢数字乙{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線漢数字乙{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄漢数字乙{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\漢数字設問 ref{変数}`」とするか、「`\設問 ref[0]{変数}`」とするか、「`\漢数字乙 ref{変数}`」とします。

「漢数字設問 ref」は漢数字専用の参照を行います。「漢数字設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は長円形 (カプセル型) で囲んだ記号、[2] と [3] は文字の上下をかつこで囲んだ記号になります。[3] は他の記号では、文字の左右をかつこで囲んだ記号になりますが、漢数字は 2 桁以上になることがありますので、このようにしています。オプションを省略すると記号のみになります。

「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。ただし、漢数字は 2 桁以上になる場合、○で囲んだ記号は正常に表示されません。また、文字の左右をかつこで囲んだものも見栄えのよいものにはなりません。

「`\漢数字乙 ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{漢数字乙設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{漢数字乙設問}{11}` などとした後に、「`\`

下線漢数字乙{変数}{下線を引く箇所}」や「\空欄漢数字乙{変数}」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「十二」を表示します。

なお、漢数字順 (12 を十二と表記する方法) は最大 120 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(6) 漢数字順 (12 を一二と表記する方法)

傍線付きの問題で漢数字順 (12 を一二と表記する方法) の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のよう定義しておきます。

```
\def\傍線漢数字甲#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字甲設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線漢数字甲#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字甲設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線漢数字甲#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\漢数字甲設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「漢数字甲設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は長円形 (カプセル型) で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では tsayusen.sty と tnamisen.sty を使用し、\sayubosen、\miginijusen、\miginamisen 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「\傍線漢数字甲{変数}{傍線を引く箇所}」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「\二重線漢数字甲{変数}{傍線を引く箇所}」や「\波線漢数字甲{変数}{傍線を引く箇所}」に変更します。

\raisebox{1pt}で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。 \raisebox{-1pt}のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は trenban.sty で指定していますので、「\空欄漢数字甲{変数}」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (\begin{document}の前など) に \fboxrule=1.5pt と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「\漢数字設問 ref{変数}」とするか、「\設問 ref[0]{変数}」とするか、「\漢数字甲 ref{変数}」とします。

「漢数字設問 ref」は漢数字専用の参照を行います。「漢数字設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は長円形 (カプセル型) で囲んだ記号、[2] と [3] は文字の上下をかつこで囲んだ記号になります。[3] は他の記号では、文字の左右をかつこで囲んだ記号になりますが、漢数字は 2 桁以上になることがありますので、このようにしています。オプションを省略すると記号のみになります。

「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。ただし、漢数字は二桁以上になる場合、○で囲んだ記号は正常に表示されません。また、文

字の左右をかつこで囲んだものも見栄えのよいものにはなりません。

「`\漢数字甲 ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は`\setcounter{漢数字甲設問}{0}`とします。また、連続しない番号を付番する場合も`\setcounter{漢数字甲設問}{11}`などとした後に、「`\下線漢数字甲{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄漢数字甲{変数}`」とすると、11 番目の次の 12 番目に該当する「一二」を表示します。

なお、漢数字順 (12 を十二と表記する方法) は最大 120 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(7) 半角の英小文字 (abc) 順

傍線付きの問題で半角の英小文字 (abc) 順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線 abc#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\abc 設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線 abc#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\abc 設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線 abc#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\abc 設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「abc 設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線 abc{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線 abc{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線 abc{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄 abc{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\abcref{変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\abcref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。

ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は`\setcounter{abc 設問}{0}`とします。また、連続しない番号を付番する場合も`\setcounter{abc 設問}{12}`などとした後に、「`\下線 abc{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄 abc{変数}`」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「m」を表示します。

なお、半角の英小文字 (abc) 順は最大 26 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(8) 半角の英大文字 (ABC) 順

傍線付きの問題で半角の英大文字 (ABC) 順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線 ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC 設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線 ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC 設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線 ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC 設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「ABC 設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線 ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線 ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線 ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄 ABC{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\ABCref{変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\ABCref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は`\setcounter{ABC 設問}{0}`とします。また、連続しない番号を付番する場合も`\setcounter{ABC 設問}{12}`などとした後に、「`\下線 ABC{`

変数}{下線を引く箇所}」や「\空欄 ABC{変数}」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「M」を表示します。

なお、半角の英大文字 (ABC) 順は最大 26 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(9) 全角の英小文字 (a b c) 順

傍線付きの問題で全角の英小文字 (a b c) 順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線 a b c #1#2{\raisebox{1pt}{%  
\a b c 設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線 a b c #1#2{\raisebox{1pt}{%  
\a b c 設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線 a b c #1#2{\raisebox{1pt}{%  
\a b c 設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「a b c 設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では tsayusen.sty と tnamisen.sty を使用し、\sayubosen、\miginijusen、\miginamisen 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「\傍線 a b c {変数}{傍線を引く箇所}」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「\二重線 a b c {変数}{傍線を引く箇所}」や「\波線 a b c {変数}{傍線を引く箇所}」に変更します。

\raisebox{1pt}で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。 \raisebox{-1pt}のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は trenban.sty で指定していますので、「\空欄 a b c {変数}」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (\begin{document}の前など) に \fboxrule=1.5pt と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「\設問 ref [0]{変数}」とするか、「\a b c ref{変数}」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「\a b c ref{変数}」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は \setcounter{a b c 設問}{0} とします。また、連続しない番号を付番する場合も \setcounter{a b c 設問}{12} などとした後に、「\下線 a b c {変数}{下線を引く箇所}」や「\空欄 a b c {変数}」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「m」を表示します。

なお、全角の英小文字 (a b c) 順は最大 26 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(10) 全角の英大文字 (A B C) 順

傍線付きの問題で全角の英大文字 (A B C) 順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線ABC#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\ABC設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「ABC設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等に行っていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線ABC{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄ABC{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\ABC ref{変数}`」とします。「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「`\ABC ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{ABC設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{ABC設問}{12}` などとした後に、「`\下線ABC{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄ABC{変数}`」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「M」を表示します。

なお、全角の英大文字 (A B C) 順は最大 26 になりますので、それ以上の数を指定するとエラーになります。

(11) アラビア数字順

傍線付きの問題でアラビア数字順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線数字#1#2{\raisebox{1pt}{}%  
\数字設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線数字#1#2{\raisebox{1pt}{}%  
\数字設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線数字#1#2{\raisebox{1pt}{}%  
\数字設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「数字設問」のオプションは [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等に行っていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線数字{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線数字{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線数字{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄数字{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\数字設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\数字 ref{変数}`」とします。

「数字設問 ref」は数字専用の参照を行います。「数字設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみにになります。なお、○で囲んだ記号は 2 桁までの数字を想定しています。

「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみにになります。

「`\数字 ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみにになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{数字設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{数字設問}{12}` などとした後に、「`\下線数字{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄数字{変数}`」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「13」を表示します。

なお、アラビア数字順は特に限度はありませんが、丸で囲んだ記号にしたい場合は最大 99 を想定しています。100 以上は○からはみ出していますので、ご注意ください。

(12) 丸数字順

傍線付きの問題で丸数字順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線丸数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\丸数字設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線丸数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\丸数字設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線丸数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\丸数字設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「丸数字設問」のオプションは [0],[1],[2],[3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をカッコで囲んだ記号、[3] は文字の左右をカッコで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線丸数字{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線丸数字{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線丸数字{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄丸数字{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\丸数字設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\丸数字 ref{変数}`」とします。

「丸数字設問 ref」は丸数字専用の参照を行います。「丸数字設問 ref」のオプションには [0],[1],[2],[3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をカッコで囲んだ記号、[3] は文字の左右をカッコで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。なお、オプションで [1] を指定すると、丸数字をさらに○で囲んだ記号になってしまいますので、実用には適していません。

「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0],[1],[2],[3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をカッコで囲んだ記号、[3] は文字の左右をカッコで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。なお、オプションで [1] を指定すると、丸数字をさらに○で囲んだ記号になってしまいますので、実用には適していません。

「`\丸数字 ref{変数}`」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は`\setcounter{丸数字設問}{0}`とします。また、連続しない番号を付番する場合も`\setcounter{丸数字設問}{12}`などとした後に、「`\下線丸数字{変数}{下線を引く箇所}`」や「`\空欄丸数字{変数}`」とすると、12 番目の次の 13 番目に該当する「13」を表示します。

なお、丸数字順は最大 20 です。それ以上の数を指定するとエラーになります。丸数字は環境依存文字ですので、`dvipdfmx` を使って、`dvi` ファイルから `pdf` ファイルに変換すると、文字化けしてしまいますので、ご注意ください。あくまでも `dvi` ファイルから直接印刷するか、アラビア数字との比較を行うために作成したものです。利用される場合は十分ご注意ください。`pdf` ファイルで丸数字が表示できるようにするには、`dvi` ファイルで `[file] - [print]` を選択し、`[setup]` ボタンをクリックして、ジャストシステムの PDF ソフトである JUST PDF 2 を指定して、`pdf` ファイルに変換します。

(13) 全角数字順

傍線付きの問題で全角数字順の記号を付けたい場合は、作成する文書で以下のように定義しておきます。

```
\def\傍線全角数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\全角数字設問 [0]\label{#1}}\sayubosen{#2}}  
\def\二重線全角数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\全角数字設問 [0]\label{#1}}\miginijusen{#2}}  
\def\波線全角数字#1#2{\raisebox{1pt}{%  
\全角数字設問 [0]\label{#1}}\miginamisen{#2}}
```

上記の「全角数字設問」のオプションは `[0]`, `[1]`, `[2]`, `[3]` の 3 種類があります。`[0]` は記号のみ、`[1]` は○で囲んだ記号、`[2]` は文字の上下をかつこで囲んだ記号、`[3]` は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。

また、傍線の種類は上記の例では `tsayusen.sty` と `tnamisen.sty` を使用し、`\sayubosen`、`\miginijusen`、`\miginamisen` 等にしていますので、必要であれば変更してください。

実際に文書の中で傍線を引く箇所を指定するには、「`\傍線全角数字{変数}{傍線を引く箇所}`」とします。変数には後で参照する記号を指定します。記号は英数字や漢字を指定することができます。「傍線を引く箇所」には実際に傍線を引く箇所を指定します。

傍線を二重線や波線にしたい場合は、「`\二重線全角数字{変数}{傍線を引く箇所}`」や「`\波線全角数字{変数}{傍線を引く箇所}`」に変更します。

`\raisebox{1pt}` で設定しているのは、表示する記号と傍線の近さです。`\raisebox{-1pt}` のようにポイント数を減らすと近くなりますし、増やすと遠くなりますので、記号によって調整してください。

空欄は `trenban.sty` で指定していますので、「`\空欄全角数字{変数}`」とすることで記号のついた空欄を作成することができます。なお、空欄を太枠にしたい場合は、空欄を指定する前 (`\begin{document}` の前など) に `\fboxrule=1.5pt` と指定します (指定しないと 0.4pt の太さになります)。

上記の傍線を付けた箇所や空欄を参照する場合は、「`\全角数字設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\設問 ref [0]{変数}`」とするか、「`\全角数字 ref {変数}`」とします。

「全角数字設問 ref」は全角数字専用の参照を行います。「全角数字設問 ref」のオプションには `[0]`, `[1]`, `[2]`, `[3]` の 3 種類があります。`[0]` は記号のみ、`[1]` は○で囲んだ記号、`[2]` は文字の上下をかつこで囲んだ記号、`[3]` は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「設問 ref」はどの記号にも対応する汎用的な参照を行います。「設問 ref」のオプションには [0], [1], [2], [3] の 3 種類があります。[0] は記号のみ、[1] は○で囲んだ記号、[2] は文字の上下をかつこで囲んだ記号、[3] は文字の左右をかつこで囲んだ記号になります。オプションを省略すると記号のみになります。

「**\全角数字 ref{変数}**」はもともと空欄を参照するために作成したのですが、傍線部分の参照も可能です。ただし、こちらはすべて記号のみになります。

変数の番号は傍線も空欄もあわせて付番されます。初期値化する場合は `\setcounter{全角数字設問}{0}` とします。また、連続しない番号を付番する場合も `\setcounter{全角数字設問}{7}` などとした後に、「**\下線全角数字{変数}{下線を引く箇所}**」や「**\空欄全角数字{変数}**」とすると、7 番目の次の 8 番目に該当する「8」を表示します。

なお、全角数字順は最大 9 です。それ以上の数を指定するとエラーになります。

4 サンプル

trenban.sty のサンプルは trenban.zip に同梱されている trenban_test.pdf になりますので、こちらをご覧ください。trenban_test.pdf の作成元は trenban_test.tex です。こちらは tex ファイルから dvi ファイルに変換した後、dvipdfmx で pdf ファイルに変換したものです。したがって、丸数字はすべて文字化けしています。

また、trenban_test 丸数字.pdf は trenban_test.tex を dvi ファイルに変換した後、dvi ファイルで [file] - [print] を選択し、[setup] ボタンをクリックして、ジャストシステムの PDF ソフトである JUST PDF 2 を指定して、pdf ファイルに変換したものです。この方法で実行すれば丸数字が表示できます。

それ以外に藤田眞作著「LaTeX2ε 入門縦横文書術」の第 9 章「国語のテスト」に掲載された例文を trenban.sty を使った形に改編したものを kokugo_test17.pdf、kokugo_test18.pdf、kokugo_test19.pdf として同梱しています。上記の pdf ファイルの元になった tex ファイルも kokugo_test17.tex、kokugo_test18.tex、kokugo_test19.tex として同梱しています。